

論文審査の結果の要旨

請求者氏名 中野晴久
学位の種類 博士（文学）
学位論文題目 中世常滑窯の研究

1. 論文の視角と研究史上の特色

中野晴久氏の学位請求論文は、知多半島において12世紀初頭から16世紀末にかけて展開した常滑窯に関する考古学研究である。中世常滑窯は窯数が5,000基から6,000基におよぶ中世最大の窯業地で、中野氏は1980年代より窯跡の発掘調査をはじめ、製品の展示や学術論文の発表を通じて、常滑窯の調査・研究を常に先導してきた。常滑窯に関する最新の考古学データは、2012年に刊行された『愛知県史別編窯業3中世・近世常滑系』に集成されているが、『愛知県史』は資料編としての性格が強いもので、中野氏独自の知見を披露する場ではないため、本論文は、中野氏の中世常滑窯研究の集大成といえる内容を有している。

中世常滑窯をはじめとする中世窯の研究（窯業史研究）は、歴史考古学における研究分野の一つである。考古学研究の基本は編年研究であり、これまでの中世窯の研究は製品の編年研究を中心に進められてきた。本論文でも詳述されているように、中世常滑窯の編年研究は中野氏によって確立されたものであり、常滑窯製品のような広域流通陶器は、消費地遺跡の年代決定ばかりではなく、全国に展開した常滑系中世窯の成立年代を考える上で重要な指標となっている。

加えて、本論文では、詳細な編年研究を基にして窯跡の分布、窯体構造の変遷、製品の機能（用途）等について、渥美窯・猿投窯・瀬戸窯など東海諸窯と比較しつつ分析・考察しており、中世常滑窯の歴史的な性格について新知見を提示している。各中世窯の比較研究は中世窯業の位置付けを考える上で重要なテーマであり、本論文は今後の中世窯研究の方向性を示したという意味で評価できる。

2. 論文の要旨

中野氏の学位請求論文は、序章から結章までの五つの章から構成されている。以下、章ごとに内容をみていきたい。

（1）序章「中世常滑窯研究史概略」

これまでの中世常滑窯に関する研究の歴史を総括したものである。単に中世常滑窯の研究史に留まらず、歴史考古学の研究史の中に窯業史研究を位置付けた内容になっており、今後の中世窯を研究する上で基本的な論考である。

（2）第1章「編年研究と生産地の変遷」

第1節「中世常滑窯の編年」は、12世紀から16世紀に至る500年間で1 a型式期～12型式期の14期に区分した、中世常滑窯製品の最新の編年研究を提示・詳述している。常滑窯製品の編年研究は、以下の章節における中野氏の常滑窯研究の基礎であるとともに、全国各地で出土することから消費地遺跡の年代を決定する上で、さらに各地に展開した常滑窯が影響を与えたとされる瓷器系中世窯の成立年代を決定する上で重要な指標となるものである。

第2節「中世常滑窯の成立と展開」は窯跡の分布論である。中世常滑窯を生産内容により山茶碗主体窯と甕主体窯とに大別し、それぞれの時期別の分布状況から中世常滑窯の形成過程について検討を加えたものである。山茶碗主体窯は、1 a型式期（12世紀第1四半期）から6 a型式期（13世紀第3四半期）まで半島各地に存在するが、その後全く認められなくなるとした。それに対して、甕主体窯は1 b型式期（12世紀第2四半期）に成立し7型式期（14世紀前半）までは丘陵部で生産されるが、8型式期（14世紀後半）以降は伊勢湾側の集落周辺に集中することを明らかにしている。

（3）第2章「技術・遺構論」

第1節「中世常滑窯の技術」は、中世常滑窯の基本的生産技術について、成形技法、装飾技法、焼成技法に分けて現状の到達点を披露したものである。このうち焼成技法については、中世常滑窯の基本的な築窯技術と焼成技術の検討を加えた上で、焼成実験の成果を参考にしつつ、窖窯の燃焼室や煙道部に天井が存在したか否かについての長年の研究課題に対して、天井は存在しなかったという結論を導き出している。

第2節「中世常滑窯の窯体構造」はいわゆる遺構論である。中野氏は、窯体構造を山茶碗主体窯と甕主体窯とに大別しその変遷を明らかにしている。それによると、1 b型式期に出現する甕主体窯は、渥美窯の甕主体窯と同様な形状であるのに対し、2型式期（12世紀第3四半期）には一般的な山茶碗主体窯と類似した形状のものとなり、以降徐々に変化した長大な甕主体窯が完成するという、常滑窯における甕工人と山茶碗工人との協業のあり方を考える上で重要な指摘を行っている。

（4）第3章「遺物・装飾論」

本章は中世常滑窯の製品についてのいわゆる遺物論である。第1節「甕出現期の様相」は、中世窯における甕生産の成立事情について検討を加えたものである。東海地方では、12世紀初頭には古代灰釉陶器から山茶碗生産へと転換し、その直後に甕生産が導入される。中野氏は、古代末期の甕は、生産量が極めて少ないことや当て具痕が残ることから、中世の甕への連続性が希薄であるとし、新たに技術が導入された可能性を指摘する。そして、叩き手法における大宰府や平安京における古代瓦との類似性を挙げ、12世紀代には猿投窯・常滑窯で瓦陶兼業窯が広範に確認されること、渥美窯では経塚関連製品の銘文に「僧（仏師）」や「瓦工」が存在することから、中世の甕生産は、瓦工人の窯場への参画によって成立した可能性があることを明らかにした。

第2節「三筋壺の出現と展開」では、中世常滑窯を代表する器種の一つである三筋壺を

はじめ、猿投窯や渥美窯の刻画文陶器などの三筋文系陶器を含めて検討を加えたものである。渥美窯・猿投窯の経筒外容器には、仏塔としての意匠が認められる器形が存在することから、三筋文についても仏塔に由来する可能性を指摘し、渥美窯・猿投窯の刻画文陶器は詠え物（特注品）的な性格、常滑窯の三筋壺は需要を見込んで生産された商品としての性格が強いと推測する。また、生産者については、刻画文陶器は瓦工人によって制作されたのに対し、三筋壺は新たな装飾として三筋文が瓦工人によってもたらされ、山茶碗工人ないし甕工人により量産されたと考察している。

第3節「中世常滑窯の押印文について」は、甕を主体に800種類以上確認されている原体を集成した押印文の基礎的な研究で、中野氏はA類からJ類に分類している。押印文には叩き手法と押捺手法とに大別されるが、このうち大勢を占める大形甕の叩き手法は、これまでは調整技法と考えられてきたが、時期が下るにつれて徐々に簡略化する傾向が認められることから、装飾技法として捉え直す必要があることを明らかにした。また、押捺手法については古瀬戸製品との関連を指摘した。

第4節「中世常滑窯の刻文について」は、製品に施された刻文を刻画文・銘文・花押・花押状記号文・抽象的刻画文・単純記号文などに分類し、事例を紹介しつつそれぞれの意味について検討を加えたものである。このうち最も確認例が多い単純記号文については、さまざまな解釈を紹介した上で、製品に呪術性を与えた要素も認められるものの単純には解釈できないとする。単純記号文は、他の中世窯でも多く認められることから比較研究が必要で、今後の検討課題とした。

第5節「常滑窯製品に担った役割について」は、常滑窯製品を代表する壺・甕類の機能（用途）について検討を加えたものである。甕については、酒甕・藍甕・油甕などの用途が想定されるなか、中野氏は、京都における発掘事例から室町時代には酒甕としての使用が確実であるとする。また、『吾妻鏡』の建長4年（1252）いわゆる「沽酒の禁」の記載や、平泉では三筋壺は酒器として宴会に用いられ、その宴会形式は鎌倉へも受け継がれたとする見解から、主に甕は酒醸造用、小形の壺は酒器としての用途を想定した。

第6節「常滑窯製品の流通」は、中世常滑窯製品を狭域流通陶器である山茶碗・小皿と、広域流通陶器である壺・甕・鉢とに分けて、それぞれの出土分布について検討を加えたものである。まず、山茶碗類の流通については、知多半島では常滑窯の山茶碗生産の廃絶後には瀬戸窯製品が一定量認められるという重要な指摘を行っている。次に、壺・甕類の流通については、東日本太平洋側を中心とする日本全国1,687遺跡21,798点のデータから、壺・甕類の時期別の出土分布と流通経路について総括している。これまでも壺・甕類は平泉と鎌倉で大量に出土し、13世紀を境に平泉から鎌倉へと流通は大きく変化することが明らかにされていたが、より詳細に地域や時代を区分して変遷過程を解明した。具体的にみると、時期別の流通状況は、2型式期と3型式期（12世紀第4四半期）がピークである平泉を除くと、全国的には5型式期（13世紀初頭を除く前半）から6a型式期にかけてピークに達し、6b型式期以降は減少すること、鎌倉を除く関東地方と東海地方では9型式

期（15世紀前半）から10型式期（15世紀後半）にかけて再び増加傾向が認められるが、東北地方や関西地方以西の西日本では減少したままであることを指摘している。今後、中国陶磁を含めた中世陶磁器の流通構造を展望するにあたっての基礎的な考察である。

（5）結章「中世常滑窯の歴史的役割」

上記の調査・研究の総括として、知多半島に立地する窯業生産地である中世常滑窯の性格（役割）について、能登半島に立地する珠洲窯や、渥美窯・猿投窯・瀬戸窯など東海地方の中世諸窯と比較することにより考察したものである。中世前期における常滑窯・渥美窯・猿投窯・瀬戸窯の4窯業地は、相互に密接な関係を有しており、それぞれ単独ではその存在意義は解釈できない。本章での中野氏の考察は今後の中世窯研究が目指すべき一つの方向性を示したものと見える。

3. 審査結果の要旨

（1）論文の評価

中野晴久氏の30年におよぶ常滑窯の研究を、本学文学研究科歴史学専攻博士後期課程の在学中に集大成したものである。中世常滑窯に関する考古学データは、『愛知県史別編窯業3中世・近世常滑系』に集成されているが、本論文では、そのデータの解釈を総合的に試みたもので、中世常滑窯研究の最先端を示す研究論文である。中野氏が描く中世常滑窯の歴史像については、今後さまざまな議論を呼ぶことが推測されるが、そのこと自体が中世窯の研究（窯業史研究）、延いては歴史考古学の進展に大いに寄与するものと確信する。

（2）今後の課題

口述試験では、次のような中世常滑窯の研究上の課題が指摘された。①中世常滑窯の範囲について。知多半島基部の山茶碗主体窯は常滑窯の範囲に含まれているが、半島基部には甕主体窯は存在せず、その北部には中世猿投窯が連続して分布している。常滑窯の範囲について再検討する必要がある。②常滑窯製品の流通について。第3章第6節で示された時期別の流通状況から、壺・甕類の流通には幾つか段階が設定可能なように見受けられた。段階ごとに整理することにより流通の実態がより鮮明になると思われる。③全国各地に展開する常滑窯系とされる瓷器系中世窯について。それらの窯業地には常滑窯からの影響が認められるが、常滑窯の問題は影響の内容である。常滑窯工人の直接移動によって成立するのか、それは甕工人であったのか、あるいは山茶碗工人であったのか、今後の研究の進展に期待したい。

4. 審査結果

以上、中野晴久氏の学位請求論文は愛知学院大学学位規則第3条第2項により、審査委員一同、博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、合格と判定した。

平成 26 年 1 月 14 日

審査委員

主査 教授 藤澤良祐

副査 教授 白石浩之

副査 教授 福島金治

副査 大阪大学大学院
准教授 高橋照彦